

# 体験活動の効果及び評価のあり方に関する一考察 —子どもの体験活動事例を追って—

時 代<sup>1)</sup> 明石要一<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>千葉大学・教育学部客員研究員 <sup>2)</sup>千葉大学・教育学部

## Effect of Experience Activity and How to Give Synthetic Evaluation —A Case Study of A Experience Activity Model Program—

SHI Dai<sup>1)</sup> AKASHI Youich<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>Guest Researcher, Faculty of Education, Chiba University, Japan

<sup>2)</sup>Faculty of Education, Chiba University, Japan

本論文は、子どもに対する体験活動の効果、及び評価のあり方を検討する目的であった。一つの体験プログラムをケースとして、体験活動の前後において、4つのアンケート調査を行った。その結果は、1. 1週間の自然体験・生活体験・集団宿泊体験活動をとおして、子どもは「生きる力」という総合的能力が増強し、学級の凝集性が高まり、生徒間あるいは教師と生徒間の連帯感が増え、仲間関係がより開放的に変化している。2. 以上の改善がみられる一方、「非日常」的体験によって、学級が機能しにくく、秩序に乱れが生じやすい面もある。また、学級・人間関係の変化によって不適応を起こした子どもの様子も読み取れた。いずれの問題提起は、教師はどう配慮すべきかについて、一つの手掛かりになる。3. 量的調査を通じて、子どもの変化は明らかになったが、その変化の理由と影響要因を追究するために、さらなる質的研究が必要であると今後の課題を示した。

キーワード：体験活動 (experience activity) 効果 (effect) 評価 (evaluation)

### はじめに

「学力重視」の流れのなかで、「体験」の重要性も注目されはじめています。

平成19年、中央教育審議会は「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」との答申において、青少年の「基礎的な体力の低下や不足、意欲を行動に移す段階でのつまずき」に対して、「多様な体験活動の機会を提供し、体験活動をすべての青少年の生活に根付かせる」と提言した。さらに、同年度の教育再生会議によって、「様々な体験活動を通じて、子どもたちの社会性、感性を養い、視野を広げる」ために、「学校は、子どもたちの成長段階や地域の実情を踏まえ、全ての学校段階において体験・奉仕活動を実施する。小学校で、1週間の集団宿泊体験や自然体験、農林漁業体験活動を実施」と具体的に提言された。

自然体験活動、その歴史は野外教育活動にさかのぼることができる。一方、長期にわたって野外教育活動を実践する少年自然の家は、今後自然体験活動の展開に大いに期待できる。実際、文部科学省のスポーツ・青少年局青少年課は、平成20年度「青少年体験活動総合プラン」を実施し、小学校自然体験活動プログラム開発事業を独立行政法人国立青少年教育振興機構に委託し、多くの国立青少年の家では、地域特性を生かす自然体験活動プログラム開発を行っている。

実践と同時に、「体験はどれほど重要なのか、子ども

にとってどの発達段階でどのような体験をすれば良いのか」という問題に対して、筆者らがかかわる国立青少年教育振興機構の調査研究<sup>1)</sup>によって「1. こどもの頃の体験が豊富な大人ほど、やる気や生きがいを持っている人が多い、2. 友だちの多い子どもほど学校好き、憧れる大人のいるほど働くことに意欲的である、3. 小学校低学年までは友だちや動物植物とのかかわり、小学校高学年から中学生まで地域や家族とのかかわりが大切」などの研究結果が明らかになっており、体験の有効性に理論的根拠を与えたといっても過言ではない。

さらに、自然体験活動の効果を見出すために、前述した国立青少年自然の家は地域の小学校と連携した自然体験活動を実践しながら、活動前後による子どもの変化をはかりようとしている。しかし、事業報告を見る限り、子どもの意識の変化を測定する評価がおおく、しかも体験活動の個人に対する効果が論じられることにとどまっている。

したがって、筆者らは某国立青少年交流の家と共同研究し、一つの体験プログラムをケーススタディとして、子どもの自己認識、仲間集団、学級の側面より、自然体験活動は子どもに及ぼす影響を捉えたい。さらに、体験活動を通じて生じた子どもの変化を把握する上、変化に対する手当てを探りたいのが、本研究の目的である。

### I モデルプログラムの特徴

このモデルプログラムは九州地域の国立青少年の家と地域の小学校が連携し、2009年6月29日～7月4日に、

連絡先著者：時 代

図表1 プログラムの流れ

時刻	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00			
6/29(月)						〇〇小に集合	移動	昼食	開校式	オリエンテーション (学級活動1h)		夕食作り(ご飯・コーラ煮)				入浴・生活タイム	ふりかえり	就寝準備	就寝	
6/30(火)		身じ起 た床く、	朝食づくり1(ご飯・みそ汁) (家庭科3h)			ダイナミックススペース (基地作り) (園工2h)		昼食	ダイナミックススペース(基地作り) (園工4h)			つどい・入浴・夕食・洗濯		スタンツの練習	ふりかえり	就寝準備	就寝			
7/1(水)		身じ起 た床く、	朝食づくり2(ご飯)		ダイナミックススペース (基地作り) (園工3h)			昼食	ダイナミックススペース(基地作り) (園工4h)			つどい・入浴・夕食・洗濯		スタンツの練習	ふりかえり	就寝準備	就寝			
7/2(木)		身じ起 た床く、	朝食・昼食づくり3(ご飯・カレー)				基地の 説明	慰霊祭 (学校行事1h)	昼食	明け 後の 片付け	移動	生命のつながりメ ダカやヒトの誕生 (理科1h)	移動	生命のつながり (メダカやヒトの誕生) (理科2h)	つどい・入浴・夕食・洗濯		スタンツの練習	ふりかえり	就寝準備	就寝
7/3(金)		身じ起 た床く、	朝食・昼食づくり4 (ご飯・おにぎり)		移動	沢登り(体育3h)		昼食	沢登り(体育3h)		移動・休憩	ダイナミックス スペース (基 地作り) (園工1h)		つどい・入浴 夕食・洗濯		キャンプファイアー	就寝準備	就寝		
7/4(土)		身じ起 た床く、	朝食・後片付け		目的を成した伝え方を 考えよう (国語2h)		ふりかえ (学級活 動1h)	閉校式	移動	〇〇小で解散										
時刻	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00			

1 学年1クラスの学校(小規模校)の5年生、20名の子ども(男の子5名、女の子15名)を対象とした体験活動であり、「〇〇やんちゃ教室」と名付けし、以下本プログラムと称する。図表1は本プログラムの概要である。その内容から、本プログラムの特徴が見られる。

### 1 5泊6日という長期的宿泊体験活動

3泊4日が一般的で、長くても4泊5日の長期宿泊体験活動の現状の中、体験活動の時間がまるまる2日間長く設定することで、より多くの体験活動を実現する時間を確保する。

### 2 自然体験と教科学習内容の融合

図表1で示したように、体験活動の初日、終日に学級活動の各1時間、4日目に学校行事1時間以外に、毎日の教科学習に体験的活動を取り入れる形で、効果的指導を図る。よって、合計30時間の学習時間を設定し、5年生の週時間数29時間を確保できるようにする。

### 3 生活体験の取り組み

本プログラムにおいて、朝晩に食事づくり、洗濯、掃除の時間も設定する。生活体験の中でもっとも重視したのは食事づくりである。野外調理のしかたを学習したあと、グループの話し合いで役割分担を決め、食事をつくり、後始末まで行う。一緒に食事を用意することで、自立する力を養うことだけではなく、協議の決め方、役割分担、計画の実行などの社会的スキルを身につけようとする。

## II 研究方法

冒頭で述べたように、体験プログラムを多角の視点から評価するために、今回4つの質問紙調査を体験活動の開始時(事前調査)と終了時(事後調査)2回行った。

### 1 IKR評定アンケート

「IKR評定(簡易版)」は、橘らが開発した「生きる力」

を測定するための70項目から絞り込んだ28項目である<sup>2)</sup>。その内容は、「いやなことは、いやとはっきり言える」といった心理的社会的能力(14項目)、「自分かってな、わがままを言わない」といった徳育的能力(8項目)、「早寝早起きである」といった身体的能力(6項目)の3つの能力で構成されている。

### 2 学級調査

学級の様子を把握し、生徒指導と学級経営に活用される、廣部が開発した「学級調査」の20項目である。その中で、「明るく楽しい雰囲気がある」の学級風土を測定する項目、「行事などでは、みんなが一つになって取り組める」のような学級の凝集性を測定する項目、と「いじめや言葉の暴力で悩んでいる人はいない」のような問題行動を測る項目が含まれる。

### 3 ソシオメトリック・テスト

ソシオメトリック・テストは、アメリカのモレノ(Moreno, J.L.)の理論によって開発された、子どもの遊び集団を捉える代表的手法である。本研究はその修正版、つまり「拒否」をなくし、「いつも一緒に遊んでいる人」の名前を人数限定しないほどの空欄を用意し、自由に挙げてもらう。また遊び集団の様子、リーダーの存在も書いてもらう。

### 4 エゴグラム

エゴグラム(Egogram)は、アメリカの心理学者エリック・バーン(Eric Berne)が開発した「交流分析」という人間関係の心理学理論に基づいて作られた性格診断テストである。その内容は「厳格的父親」のCP度、「養成的母親」のNP度、「成人」のA度、「自由子ども」のFC度と「従順子ども」のAC度を測定する50項目を含む。今回、修正された中学生版のエゴグラムを用い、子どもの内面的変化を探ってみる。

図表2 生きる力の下位尺度の平均点変化とt検定の結果

N=16 df=15

能力	調査項目	事前調査		事後調査		t 値	有意確率 (両側)
		M	SD	M	SD		
<b>生きる力</b>		108.9	14.6	122.4	24.1	3.570	0.0028 **
<b>心理的社会的能力</b>		53.9	8.7	59.2	13.6	2.423	0.0285 *
非依存	1. いやなことは、いやとはっきり言える	4.2	1.1	4.4	1.2		
	15. 小さな失敗をおそれない	4.4	1.0	4.4	1.4		
積極性	11. 自分からすすんで何でもやる	4.1	0.9	4.3	1.0		
	25. 前向きに、物事を考えられる	3.8	1.2	4.5	1.1		
明朗性	5. だれにでも話しかけることができる	4.0	1.2	4.3	1.5		
	19. 失敗しても、立ち直るのがはやい	3.9	1.4	4.3	1.4		
交友・協調	7. 多くの人に好かれている	3.0	1.0	3.2	1.3		
	21. だれとでも仲よくできる	3.9	1.2	4.5	1.0		
現実肯定	9. 自分のことが大好きである	2.9	1.7	3.6	2.0		
	23. だれにでも、あいさつができる	4.8	1.2	5.1	0.9		
視野・判断	3. 先を見通して、自分で計画が立てられる	3.6	1.0	3.9	1.2		
	17. 自分で問題点や課題を見つけることができる	3.4	0.9	4.2	1.2		
適応行動	8. 人の話しをきちんと聞くことができる	4.4	0.7	4.4	1.0		
	22. その場にふさわしい行動ができる	3.6	1.2	4.1	1.3		
<b>徳育的能力</b>		32.1	4.4	36.8	5.9	5.694	0.0000 ***
自己規制	14. 自分かっとな、わがままを言わない	4.1	1.3	4.6	1.2		
	28. お金やモノのむだ使いをしない	3.7	1.3	4.6	1.3		
自然への関心	6. 花や風景などの美しいものに、感動できる	4.4	1.0	4.4	1.1		
	20. 季節の変化を感じることができる	3.7	1.0	4.6	1.0		
まじめ勤勉	12. いやがらずに、よく働く	4.1	1.1	4.4	1.1		
	26. 自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる	4.3	1.1	4.9	1.0		
思いやり	2. 人のために何かをしてあげるのが好きだ	4.0	0.8	4.8	1.2		
	16. 人の心の痛みがわかる	3.9	1.2	4.4	1.1		
<b>身体的能力</b>		22.9	4.7	26.4	6.2	2.863	0.0118 *
日常的行動力	13. 早寝早起きである	3.1	1.7	4.2	1.6		
	27. からだを動かしても、疲れにくい	3.8	1.3	4.2	1.0		
身体的耐性	4. 暑さや寒さに、まけない	4.0	1.2	4.2	1.6		
	18. とても痛いケガをしても、がまんできる	3.4	1.5	4.2	1.6		
野外技能・生活	10. ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える	4.7	1.1	5.0	1.2		
	24. 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	3.9	1.3	4.6	1.3		

\* P<0.05 \*\* P<0.01 \*\*\* P<0.001

\*各項目で「とてもあてはまる」を6点、「まったくあてはまらない」を1点としてそれぞれ1点刻みで得点化し、項目ごとに平均点(M)及び標準偏差(SD)を算出

### Ⅲ 結 果

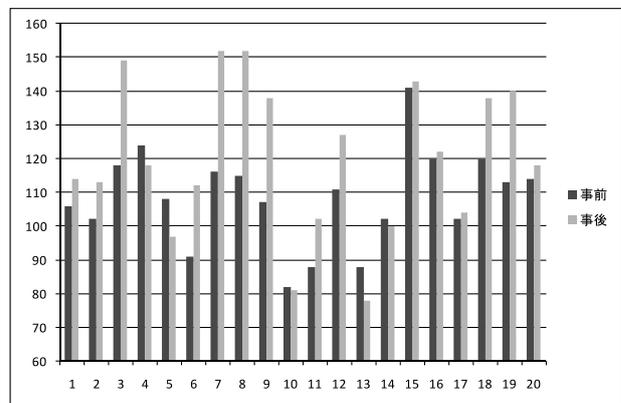
#### 1 子どもの「生きる力」の変化

「IKR評定」の事前と事後の回答を得点化し、一元配置分散分析を行い、t検定を加えた結果は図表2である。示したように、「心理的社会的能力」、「徳育的能力」、「身体的能力」3つのカテゴリーにおいて、実践前より事後の平均点は増えており、統計的有意差が認められる。特に「自己規制」、「自然への関心」、「まじめ勤勉」、「思いやり」の4尺度が含む「徳育的能力」は、実践の前後の変化が大きく(\*\*\*) $P<0.001$ 、本プログラムの有効性を示しているとも言える。

次に、個人の変化をみるために、20名の子どもそれぞれの得点を算出して、図表3の通りである。本プログラムを経験した後、13番の子どもは得点が減ったが(5番、6番の子どもの回答にNAがあるため、事後の得点が減少)、それ以外の子どもは自分に対してプラス評価している。その中で、3番、7番、8番、9番、18番、19番の子どもは事前においてそれほど目立たなかったものの、今回の体験活動に参加することによって、心身ともに著しい成長がみられた。

#### 2 クラスにもたらす変化

もし学校生活を「日常」的生活場面と考えれば、子どもにとって、本プログラムのような活動は「非日常」的体験ともいえる。自然体験あるいは生活体験活動を経験

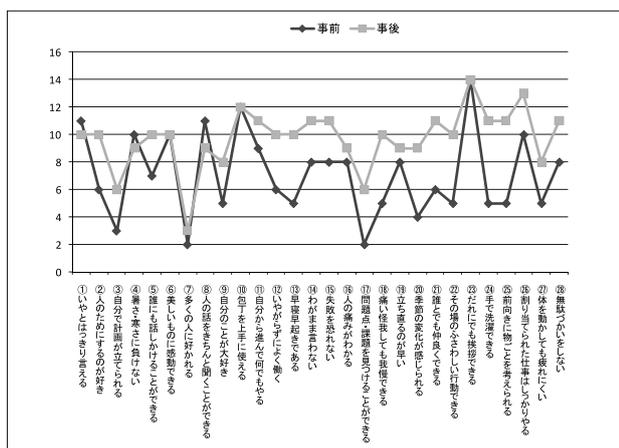


\*横軸は子どもの番号、縦軸は28項目得点の合計

図表3 子どもの「IKR評定」得点の変化

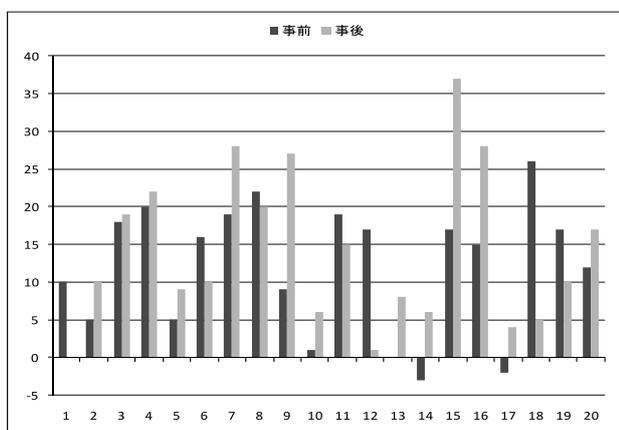
した子どもたちはクラスの中でどのような変化を表しているだろうか。

図表4は実践前後の学級に対する評価である。みると、④「協力し合う雰囲気がある」、⑪「清掃の分担が果たしている」、⑬「行事をチームで取り込める」といった集団の凝集性にプラス変化がある。また、⑩「友達分からないことを教えてくれる」、⑫「担任と気軽に話せる」、⑳「自分の悪い点を注意してくれる」のような教員と生徒あるいは生徒間の人間関係項目にもいい変化がみられる。さらにプラス変化は⑯「学習に前向きに取り組める」、⑰「移動・着替えにテキパキ行動できる」、つ



\*各項目で「良くできている」を2点、「ほとんどできていない」を-2点として得点化した  
 \*横軸は学級調査の20項目、縦軸は各項目に対する全員の得点の合計

図表4 「学級調査」の変化



\*各項目で「良くできている」を2点、「ほとんどできていない」を-2点として得点化した  
 \*横軸は子どもの番号で、縦軸は学級調査20項目得点の合計

図表5 子どもの「学級調査」得点の変化

まり学習意欲、行動様式においても効果的にみられる。一方、体験活動を通して子どもたちが相互理解を深めることより、⑥「議長を中心に話し合える」、⑱「リーダーを支える雰囲気がある」にマイナス変動があり、学級組織のあり方に変化があり、学級経営に不安定をもたらしたかもしれない。

次に子ども一人一人の変化をみると(図表5)。全クラス20名の子ども(1番と13番生徒は調査紙に未回答で除外)の多くは、実践前と比べ、体験活動後にクラスへの評価は高くなっている。その中で14番生徒は事前のマイナス評価から事後のプラス評価へ転換したことに注目したい。

図表6は14番生徒の各項目得点の変化である。実践する前に彼女はクラスに対してマイナス評価が多く、たいへん不満を抱えたようである。事後のクラスへの評価をみるとマイナス評価が減り、特にクラスの「協力し合う雰囲気」(項目④、⑭)、「チームワークで行事を取り組む」(項目⑬)、「テキパキ行動」(項目⑰)などの場面でプラス評価を与えているため、若干不満もあるが、学級

図表6 14番生徒の「学級調査」得点の変化

項目	事前	事後
1 時間を守って行動ができる	1	1
2 明るく楽しい雰囲気がある	-1	0
3 教科委員や係仕事が行われる	-1	0
4 協力し合う雰囲気がある	-1	1
5 授業中に落ち着く雰囲気	-1	0
6 議長を中心に話し合える	-1	0
7 挨拶ができています	2	1
8 いじめ・暴力に悩む人がいない	-1	-1
9 男女の区別なく話ができる	-1	-1
10 友達が分からないことを教えてくれる	2	0
11 清掃の分担が果たしている	1	1
12 担任と気軽に話せる	1	1
13 行事をチームで取り込める	-1	1
14 みんな「〇小の生活」を守ることを心がける	-1	1
15 みんな温かく接してくれて不安がない	-1	0
16 学習に前向きに取り組める	0	0
17 移動・着替えにテキパキ行動できる	-1	1
18 教室の美化に心がける	-1	-1
19 リーダーを支える雰囲気がある	0	0
20 自分の悪い点を注意してくれる	2	1

図表7 18番生徒の「学級調査」得点の変化

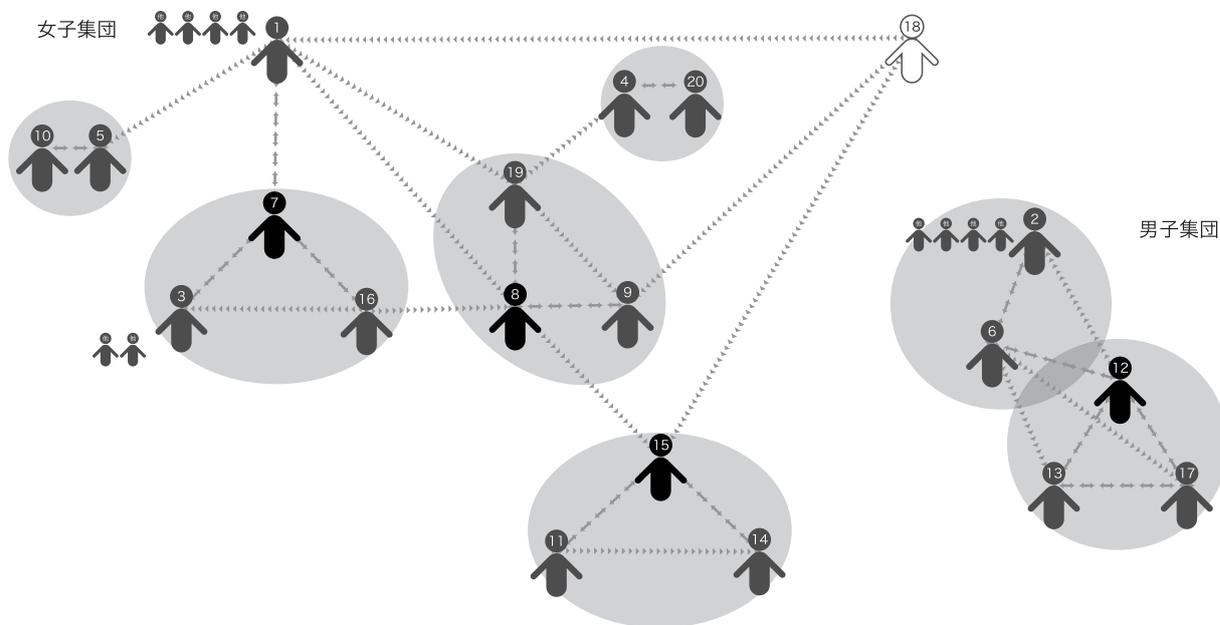
項目	事前	事後
1 時間を守って行動ができる	0	0
2 明るく楽しい雰囲気がある	1	0
3 教科委員や係仕事が行われる	2	-1
4 協力し合う雰囲気がある	2	0
5 授業中に落ち着く雰囲気	1	0
6 議長を中心に話し合える	0	0
7 挨拶ができています	-1	1
8 いじめ・暴力に悩む人がいない	2	-1
9 男女の区別なく話ができる	0	0
10 友達が分からないことを教えてくれる	2	0
11 清掃の分担が果たしている	1	0
12 担任と気軽に話せる	2	0
13 行事をチームで取り込める	2	2
14 みんな「〇小の生活」を守ることを心がける	2	2
15 みんな温かく接してくれて不安がない	1	-1
16 学習に前向きに取り組める	2	2
17 移動・着替えにテキパキ行動できる	2	1
18 教室の美化に心がける	1	0
19 リーダーを支える雰囲気がある	2	-1
20 自分の悪い点を注意してくれる	2	1

に親近感が生まれたと考えられる。

しかし一方、学級に対する評価は下がるケースもみられる。18番生徒のクラス評価をみよう(図表7)。彼女の学級に対する事後評価において、事前より2点以上下がったのは20項目中に7項目を占めている。項目の内容をみると、彼女の悩みは学級のまとまりとクラスの教師との関係、生徒間の関係に集中している。特に⑧「いじめ・暴力に悩む人がいない」の得点は事前の2点から事後の-1点に急減するため、何らかの原因で彼女の周囲に人間関係がこじれているようである。

### 3 子どもの友人関係の変化

今回の調査対象は小規模校の5年生徒である。単学級でクラス替えを体験していないため、クラス全体で大ファミリー的な仲よしグループをつくられると思われる。しかし、図表8が示したように、15名の女の子が多数派で、男の子は5名しかいないという男女構成の影響で、クラ



図表8 ソシオメトリック・テストの結果（事前）

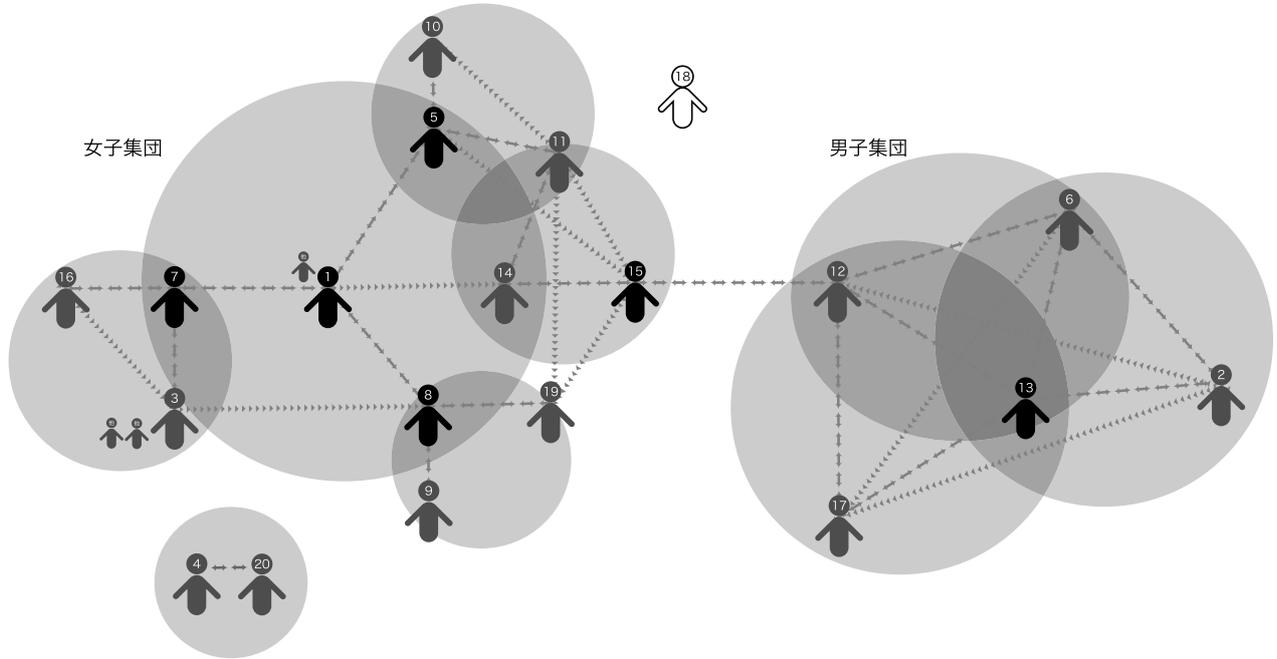
スのメンバーはいくつの遊び集団に分かれている。さらに仲よしグループにリーダーがいないと思っている生徒はほとんど（18名）である。遊びグループの特徴をたずねると、2番、7番、10番と20番生徒だけは、自分の所属するグループに「お揃い物がある」、「暗号がある」、「グループの名前がある」、あるいは「ルールがある」と回答し、ほかのグループでは「無回答」あるいは「ニックネームで呼びあう」段階にとどまる。図表8を見ると、男子生徒5名は2つの遊びグループになっているが、12番生徒は両方のグループに好まれ、中心人物である（スター）と考えられる。女の子はだいたい2名あるいは3名にかたまり、3人グループに中心になる子がいるが、わりと閉鎖的集団をつくっている。18番の生徒はクラス中の3人を遊びメンバーと思っているが、同級生に選択されていない（周辺児）。

一週間の濃い内容の体験活動を通して、子どもの遊び集団はどう変化してきたかを事後のソシオメトリック・テストで測ろうとした。まず「仲よしグループにリーダーがいない」との回答数は18で事前と変わらなかった。遊びグループの特徴から子どもの変化をみると、3番と4番生徒は自分のグループでは「お揃い物」と「ニックネーム」を共有していると思い、7番生徒のグループでは「ルールがある」項目が増えたため、遊び集団の形態に変化があると考えられる。さらに、「一緒に遊んでいる友達の名前」で遊び集団の構造を改めて測定すると（図表9）、以下の変化がみられた：①キーパーソン（12番と15番生徒）で男女のグループのつながりができた、②

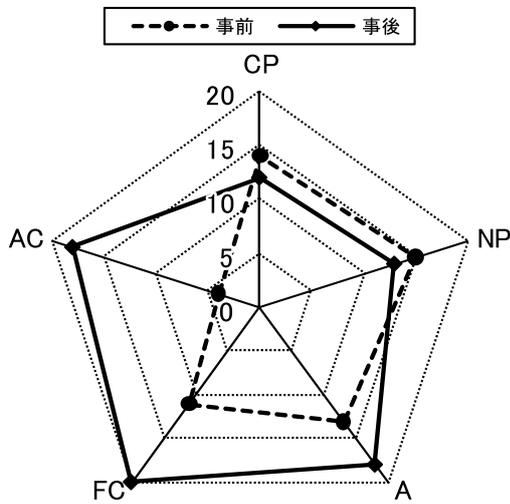
2人組あるいははっきりとグループに属しなかった生徒はほかのグループとつながっているため、新しい中心人物である1番、5番と13番生徒は登場した、③各仲よしグループの中心人物につながりがあり、さらに「人気者」の仲よしグループが現れた、④18番生徒は選択せず選択されず、ひとりぼっちとなっている。

#### 4 こどもの内面的変化

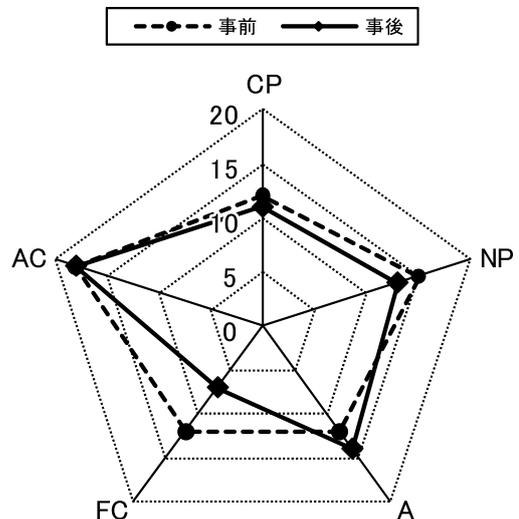
子ども内面的変化を測るため行ったエゴグラムにおいても、活動前後による子どもの変化がみられた。紙幅のため、すべての結果の提示を割愛するが、図表10のように、15番生徒は事前の「AC度が低く、感情になりやすい」から、事後の「A度、FC度、AC度とも18点以上に増えたので、冷静に物事を判断でき、しかも周りの人を楽しませることができるようになってきたのではないか。特にAC度は4点から18点まで上昇して、周りの意見を聞く姿勢ができて、協調性が現れた」に捉えることができた。このような変化は15番生徒が遊び集団の中で活躍する理由を説明できるかもしれない。他方、18番生徒のエゴグラム（図表11）をみると、「AC度が高く、協調性があるが、遠慮しやすい」性格は、事後では「FC度が12点から7点まで下がっていたため、より非積極になった」とみられ、彼女の不適応が改めて判断された。



図表9 ソシオメトリック・テストの結果（事後）



図表10 15番生徒のエゴグラム結果



図表11 18番生徒のエゴグラム結果

む す び

1 自然体験モデルプログラムの有効性

本稿では本プログラムの具体的実施過程を省略し、体験活動の内容（図表1）及びプログラムの特徴のみ紹介したが、本研究で行う諸評価によって、本プログラムのような体験活動の有効性が十分に検証できたと考えられる。1週間の時間をかけて、自然体験、生活体験と集団宿泊体験を通じて、子どもは大きな成長を遂げることができた。まず、「心理的社会能力」、「徳育的能力」、「身

体的能力」を含める「生きる力」の増強は統計的有意が認められ、本プログラムが「生きる力」の育成に良い影響を及ぼすと確認できた。次に、学級調査によって、その場での体験にとどまらず学級のあり方にも良い影響を与えることは認められた。子どもが「非日常」から「日常」に戻っても、「チームとして学級」という凝集性が高まり、生徒間あるいは教員と生徒間に「一緒に過ごし、一緒に頑張った」という連帯感が増えた。さらに、体験活動は生徒の「裏文化」としての仲間集団にも影響を与えていた。一緒に困難を乗り越える経験は、普段の仲よ

しグループ間つながりをもたらし、分散そして閉鎖的小集団から変化していくと予想される。

## 2 活動後配慮すべきこと

体験活動に対する評価はポジティブな表現が多い。しかし一方、学校行事のあとに学級の秩序に乱れが生じ、または生徒の間に人間関係がこじれることは現場の教師にとって一喜一憂であるだろう。今回の調査では子どもの変化を客観的にみることができた。体験活動によって、集団の凝集力・人間関係、そして学習意欲・行動様式に改善がみられる一方、もとの学級組織が機能しにくく、学級経営に手を打つ必要があるとデータから読み取れる。さらに、学級調査より、18番生徒は「協力しあい、リーダーを支える」、「分からないことを教えてくれる」雰囲気を感じられず、「担任と気軽に」話せなくなり、「みんなと温かく接する不安」もあり、さらに「いじめ・暴力に悩んでいる」と、いくつかの不応が察知できる。ソシオメトリック・テストからも、18番生徒は活動後にひとりぼっちの境地に陥ったと語られている。したがって、活動後学級にどのような変化があり、生徒にどのような変化をもたらしたかが見えることで、教師がどのように配慮すべきかについて、一つの手掛かりになる。

## 3 体験活動による評価のあり方

学力と違い、体験活動を評価することが難しい。本研究は1つの体験活動を通して、子どもの「生きる力」という総合的能力、学級のあり方、遊び集団（仲間集団）と子どもの性格の変化を量的に捉えるケーススタディである。結果は以上のように、体験活動の効果と問題点はある程度に見えてきた。しかし一方、子どもたちはなぜこのように変化してきた、どのようなきっかけをつくればよりよい変化できるかについて、さらに質的調査あるいはアクションリサーチによって解明する必要があるだ

ろう。今後の課題にもなるが、このような研究を積み重ね、体験活動に対する評価のあり方を構築していきたい。

## 参考文献

- 明石要一（2002）『学級の集団的機能を見直す』 明治図書
- 小林道正・杉本克之・佐伯英人（2010）「小学生の集団宿泊活動の教育効果—小学校自然体験活動のモデルプログラムについて」（報告）『『青少年教育フォーラム』第10号 P. 109～117
- 斉藤 雄・松井和彦（2010）「小学校と連携した長期自然体験活動の実践報告」（報告）『『青少年教育フォーラム』第10号 P. 95～107
- 坂本昇一ら（1988）『青少年の野外教育活動に関する研究—「少年自然の家」における活動による実証的考察』（報告書）財団法人 伊藤忠記念財団
- 住田正樹（1995）『子どもの仲間集団の研究』九州大学出版会
- 杉山峰康（1985）『交流分析（講座サイコセラピー8）』日本文化科学社

## 注

- 1 独立行政法人国立青少年教育振興機構（2010）「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」（中間報告）
- 2 独立行政法人国立青少年教育振興機構（2010）「事業評価に使える〈生きる力〉の測定・分析ツール」
- 3 教育現場の実践者。専門分野は生徒指導、学校支援ボランティアなど幅広い。教諭、教育委員会学びセンター所長など歴任し、2010年に木更津市立太田中学校校長。